

1 国語科で育てたい生徒

「対話を通して自分の思いや考えに立ち返り、深めることができる生徒」

赴任して間もないときの校内研究会で、国語科で育てたい生徒を尋ねられた。私はそのようなことを考えたことが無く、はっきりと答えることもできなかったが、同僚の諸先輩方と話すことで、私が国語科で育てたい生徒の姿をイメージすることができた。これからを担う子供たちにも、今までに考えたことがない物事や予測できない未来が待ち受けている。それらに対して、周りの人々と意思疎通を図りながらよりよく暮らして欲しいという私の願いがあったからだ。

このことから、今年1年間は生徒と生徒の対話を中心に授業実践に取り組んできた。その中から、1年生の古典教材を扱った単元の授業実践から、教師のMy Learningをまとめる。

2 授業実践より(蓬萊の玉の枝―「竹取物語」から)

〈単元目標と授業の展開〉

○自分たちの読みを朗読にどう生かしたかを伝え合うことを通して、場面や登場人物の様子を考えることができる。

本時を行う学級の生徒は、授業で繰り返し音読をしてきた。文章を間違えずに読んだりすらすらと読んだりすることができるようになるにつれて、文章の工夫やキーワードに着目することができるようになっていった。しかし、文学的な文章ではすらすら読めるようになっても心情を声に表すことはなかった。

このことから、本単元では言語活動として朗読を、相手意識をもたせるために発表相手に小学6年生を、それぞれ設定した。これにより、生徒は進んで、様々な朗読をしたり聞いたりしながら、繰り返し文章を読んで場面や登場人物の様子を読み深められると考えたからだ。

特に、生徒の読みを深めるために、生徒の朗読の聞き合いやプロの朗読の鑑賞を行う活動を設け、そこで気付いた工夫を伝え合うことで、場面や登場人物の心情を深く考えさせる手立てとした。

時(次)	学習活動の概要
第1次 (第1時)	音読や古典と口語訳を対応させることを通して、古典の文章と現代の文章の違いを確かめる。
第2次 (第2～6時)	物語の要約を読んだり絵を見たりしてあらすじを知る。 朗読するパートを決めて読み、分かったことや気付いたことから登場人物や場面の様子を捉える。 各自が捉えたことをもとに、朗読の工夫を班で考えて朗読の練習をしたり、一座で集まって発表の流れを組み立てたりする。 同じパートの班が集まって読みを朗読にどう生かしたかを伝え合い、場面や登場人物の理解を深める。
第3次 (第7～8時)	朗読会を行い、朗読会の様子を振り返る。 学習を振り返ったり朗読会のビデオを見たりして登場人物の人物像をまとめる。

〈授業実践を通しての学び〉

生徒の朗読を聞き合い、他の班がどのような工夫をしているのか学び合った。朗読の工夫で良かった点や、その理由を伝え合うことを通して、登場人物や場面の様子を確認したり、心情を考えたりすることができた。

例えば、「金・銀・瑠璃色の水、・・・。」に工夫を加えて読んだ生徒Tがいた。理由を尋ねると、天女から

「ここは蓬莱の山だ」と聞いた嬉しさだけでなく、実際にくらもちの皇子が自分の目で山の様子を見て「ここは蓬莱の山だ」と確信した嬉しさも重なるのではないかと考えたからと答えた。この「金・銀・瑠璃色の水、・・・」の一文には、「嬉しい」という感情の言葉の叙述はない。しかし、繰り返し読むことで、生徒Tは前後の場面の様子と登場人物の様子が理解でき、さらに深く登場人物の心情を考えられたのではないかと考える。

御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃やすべきよし仰せ  
(御文は手紙の裏の裏面に書かれて、火をつけて燃やすようにと、この「ふじの山」に「不死の薬」を燃やしたと、生徒Sは推測した。)  
 そのよしうけたまはりて、土どもあまた具して山へ登りけるよ  
(生徒Sは「ふじの山」として「不死の薬」を燃やしたと推測した。)  
 山を「ふじの山」とは名づける。  
(生徒Sは「ふじの山」として「不死の薬」を燃やしたと推測した。)  
 その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言ひ伝へたる。  
(生徒Mは「ふじの山」として「不死の薬」を燃やしたと推測した。)

図1  
「国語1」光村図書より

- また、登場人物のセリフが少なく、地の文が多い話(図1)を読んだ生徒もいた。その内の生徒SとMは、振り返りに次のように書いている。
- 最後の部分は、帝の悲しい気持ち、でも思い出に残しておきたい気持ちというのがあったと思う。だから、手紙の不死の薬を燃やしたり「ふじの山」と名前を付けたらと思う。(生徒S)
  - 「言い伝えたる」がどういう風に言えばいいのかわからなくて、けどCDを聞いた自分でも何回も考えたりしたら、いい読み方があったのでとてもよかったです。(生徒M)

振り返りから、この話を読む生徒は、朗読を通して登場人物の心情を考えるために、2つのアプローチ方法をとっていたことが分かる。1つめは、生徒Mのように、叙述をもとに、関係する登場人物とその言動を整理し、そこから心情を想像する方法だ。不死の薬を燃やさせた理由や「ふじの山」という名を付けた理由を考えることで、帝のセリフがなくても心情を考えることができていた。2つめは、生徒Sのように、プロの朗読を聞くことを通して、古典の雰囲気や朗読でどう表現するかを実際に感じ、自分の朗読に生かす方法だ。生徒Sは、「竹取物語」を締めくくる「言い伝えたる」をどう読むか、「古くから言い伝えられている」ということや「竹取物語」が古典であるということを朗読で表現するとどんな感じなのか、悩んでいた。そこで、プロの朗読を聞かせると、「歌舞伎っぽい」という感想から、「言い伝え」と「たる」の間をたっぷりとした朗読をし、生徒Mが納得するものに仕上げていた。

これらのことから、生徒は朗読という言語活動を通して、生徒同士の対話だけでなく、叙述や登場人物の言動やプロのお手本と対話を行い、登場人物の心情を深く考えることができたと考えられる。単元末の感想では、次のような振り返りをしていた。

- 朗読をして、くらもちの皇子は「嬉しい」気持ちを出していたのに嘘の話だから、ずるがしこいと思った。(生徒T)
- 初めは、歴史的仮名遣いなどでまったく意味が分からなかったし、興味もそこまでなかったけど、やっけていくうちに、登場人物の気持ちとか読み取れるようになっていき、「古典」が面白いと思うようになった。(生徒S)
- 言葉などがむずかしくて読みづらかったけれど、6年生にも発表にあって、音読と朗読の違いを分かってくれたのでよかったです。(生徒M)

反省点として、朗読の評価の観点を教師が深く理解できていなかったことを挙げる。生徒には、「小学6年生に聞かせる朗読」だと提示した。生徒はこの提示を受け、小学6年生でも分かる朗読を目指し、分かりやすくするための工夫が様々となった。例えば、句読点で間を開けてゆっくり読んだり、登場人物の性別が分かるように性別で読み手を決めたりなどである。このときに教師が、工夫を整理し、「登場人物の心情が伝わる朗読がより良い」と目指すゴールを明確に示すことで、生徒は登場人物の心情をより深く考えながら朗読に取り組めたと考える。